

「働く」の意味分析

梶川克哉

キーワード プロトタイプ、多義構造（ネットワーク）、フレーム、メタ
ファー、〈場〉

1 はじめに

- (1) 「社長からお聞きになりませんでしたでしょうか。この会社は今倒産寸前の瀬戸際なのです。何とか会社を救おうと、社長以下、全社員が必死になって働いているんです。そういう状態ですので、とても、そんな大金をお貸しするわけには参りません。どうぞ悪しからず」(赤川次郎『女社長に乾杯!』、新潮100冊)¹
- (2) 互いに自己紹介が終ると、森田は今まで残業をしていたのだと言って、しきりに待たせたことを謝まった。ここではボクサーばかりでなくジムのオーナーといえどもどこかで働かなければ喰っていけない。自分は自動車教習所に勤めており、週に三日は残業しなくてはならない。(沢木耕太郎『一瞬の夏』、新潮100冊)
- (3) 深刻な大問題を論じるにもケーキ屋の二階でなくてはならないというのが、女性の不思議なところであるが、そこは実利的な本能が働くのであった。「たとえ話し合いは実を結ばなくても、少なくともお腹にはケーキが入る」という、転んでもタダでは起きないという精神の現れなのである。(赤川次郎『女社長に乾杯!』、新潮100冊)
- (4) 榆脳病科病院の名物患者の一人に島田さつきという中年の女がいた。彼女はビリケンさんやナベさんのように外へ出てはこなかった。彼女は誇大妄想をもつ患者の一人で、自分の前に平身低頭する者以外にはたちどころに居丈高な乱暴を働くのである。(北杜夫『榆家の人びと』、新潮100冊)

現代日本語の動詞「働く」は上の例のように使われるが、それぞれの例には対応する類義表現が存在する。例(1)では「仕事をする」、例(2)では「勤める」、例(3)では「作用する」、例(4)では「する」が類義表現として想定できる。したがっ

て、「働く」は多義語であると判断できる。²

本稿は辞書の記述を参考にして、上の例で示した4つの別義に集約し、認知言語学の観点から「働く」の多義ネットワークを明らかにすることを目的とする。

2 辞書の意味記述

まず、3つの辞書における「働く」の意味記述を見てみることにする。

『広辞苑』(第六版)

- ①うごく。³
- ②精神が活動する。「勤がはたらく」
- ③精出して仕事をする。「よくはたらく人だ」
- ④他人のために奔走する。
- ⑤効果をあらわす。作用する。「引力がはたらく」
- ⑥(他動詞的に)(悪いことを)する。「盗みをはたらく」「乱暴をはたらく」
- ⑦(文法で)語尾などの語形が変化する。活用する。⁴「四段にはたらく」

『新明解国語辞典』(第六版)

㊦く自五く〔もと、動く意〕

- ①からだ・頭を使って、仕事をする。「額に汗してはたらく(＝労働する)」「年をとってでもはたらく(＝仕事に出る)」「よくはたらく(＝労をいとわず、仕事に精を出す)人」「中心となつてはたらく(＝活躍する)」「そんな事にまで頭が働かなかった(＝気がつかなかった)」
- ②く(だれニ)ー 行動を駆りたてる何らかの精神作用が発現する。「競争心(群集心理)がはたらく」
- ③く(なにニ)ー そのものの力が、他に影響を与える。作用する。「引力(機能)がはたらく」
- ④〔文法で〕活用する。

㊧く他五く(なにニ)ー 反社会的な事をする。「強盗(悪事)をはたらく」

『講談社 類語辞典』

【「働く」のカテゴリー】

一定の成果を得ようとしたりして、体を動かし、頭を使う。「汗水垂らして働く」「昼間は法律事務所で働いている」

【「動く」のカテゴリー】

何かがそのものとして期待されたとおりの力・機能を発揮して動く。「地震のときには制御装置がはたらくので、安心だ」「睡眠不足で頭がはたらかない」「勤が働く」「あいつは悪知恵が働くやつだ」

【「する」のカテゴリー】

悪事などをする。「彼が盗みを働くなんて、魔が差したとしか思えない」

辞書での分類はそれぞれ異なるが、本稿で提案しようとする4つの別義はそれぞれ何らかの形で記述に含まれている。しかし、辞書には目立った記述がされていないが、実例を観察していくと、「職場」「仕事場」といった概念が「働く」の意味を支える上で欠かせないものではないかと感じられる。また、どの辞書でも、周辺的な意味として〈悪事（反社会的なこと）をする〉ということが記されているが、〈悪事〉であれば何でもよいというわけではない。例えば、「殺人を働く」、「いじめを働く」といった表現は容認度が下がる。この別義についても考察を加えたい。

3 「働く」の多義分析

3.1 別義1 〈動作主体を含んだ集団に貢献するために〉〈しなければならないことや期待されることを〉〈知的、肉体的能力を駆使して継続的に行うこと〉

- (5) アズさんは05年7月に来日。今年の冬休みに里帰りし、隣国の話を聞いた。ジンバブエは経済が崩壊してコレラが流行。貧しくて学校に行けず働く子も多いという。
(朝日新聞、2009年6月1日)

例(5)は、家庭の経済的理由から、学校に行けない子どもが、労働をして、その「金銭的稼ぎ」によって家計に貢献することを表す。この意味の場合、特に〈貢献〉という意味特徴が重要である。続いて次の例を見てみよう。

- (6) 「ノルマ証券、ヘトヘト証券と擲されるほど、えげつない営業を続け、様々な問題を起こしてきた。外資系金融マンを肉食獣だとしたら野村の連中だってじゅうぶんに肉食獣だ。肉食獣同士の食い合いにすぎない」確かにそうとも言える。働く側から見れば、突然の制度変更に戸惑うのも無理

はない。

(『AERA』、2009年6月1日)

例(6)は「えげつない営業を続けた野村証券の社員」を「働く側」としている。すなわち、「会社の利益に貢献するために、なりふり構わず頭脳や肉体を駆使している従業員」である。それに対するものとして、彼らを戸惑わせる「突然の制度変更」を断行することができる人々、「働かない側」が想定される。同じような対比構造の例を挙げる。

- (7) 燃費のいい小型車やハイブリッド車、電気自動車などの新製品をいかに開発し、効率的につくるか。その鍵を握るのは、経営陣と働く人々の意識変革だ。
(朝日新聞、2009年6月2日)

例(6)で想定される「働かない側」は、例(7)で「働く人々」と併記されている「経営陣(側)」ということになろう。両者とも同じ会社に属しているものの、このように異なる表現で分けられるのは「活動内容」の違いによるものである。例(5)、(6)の活動は、動作主体の意思によるものというより、他の要因によって主に肉体労働を行うことが求められている。それに対して、「経営側」の「活動内容」は主に会社の方向性を示したり、他者に指示を与えたりすることである。次の例(8)は、外的圧力の最たるものである。

- (8) マンガンは鉄に混ぜると硬度を増す作用がある。日本が戦争への道を進んでいた1935年ごろから採掘が活発化し、同鉱山では延べ約3千人の朝鮮人が働いたとされる。
(朝日新聞、2009年6月1日)

この例の「朝鮮人が働いた」という記述が、強制労働を表すとすれば、動作主体の意志はほぼ無視され、肉体労働による「(戦争への道を進もうとしている)日本」への〈貢献〉が強く求められたと察することができる。

活動に従事させる「他の要因」としては、強制力によるものだけではなく、「期待」によるものもある。

- (9) うちにはヒーローが毎回変わるチーム。試合の中で良く働く子が出てくれば、うれしいと思います。
(朝日新聞、2000年8月9日)

例(9)は高校野球の監督の自チームに対する評言であるが、この中の「働く子」とは、例(5)のような家計に貢献する子ではなく、「期待に応え、チームに貢献す

る成果を出す子」を表す。いずれにしても、体を動かすことによって生みだす〈成果〉である。

さて、この別義の場合、動作主体は人間だけにとどまらない。次の例のように、ある役割を課された動物も動作主体として表れる。

- (10) 日本には1千頭くらいの盲導犬が働いているが、必要としている人は3千～4千人いる。(朝日新聞、2009年6月1日)

例(10)では、「盲導犬」が期待される活動、つまり「目の不自由な人に貢献する活動」を行っていることを表している。ただし、このように人間に貢献する動物の例はまれで、擬人化された表現であろう。⁵また、例(11)のように、ある特殊な車両についてもこの意味で「働く」が使われるが、通常「はたらく車」という、名詞修飾の形でのみ表現される。

- (11) パトカーや消防車、ショベルなどのはたらくクルマを展示。(朝日新聞、2009年7月18日)

この別義において〈貢献〉というのは重要な要素である。というのは、たとえ動作主体がある業務に従事していても、話者が〈貢献〉を認めない場合は、「あの人は全然働かない」「働くふりをしているだけだ」といった表現が可能になるからである。

3.2 別義2 〈動作主体が報酬を得るために〉〈ある場に身を置き〉〈そこで求められることを〉〈身体活動によって継続的に行うこと〉

辞書の記述では、「職場」のような、ある〈場〉に属するかどうかは取り立てて問題にしていない。しかし、次のような「働く」の用例に接したとき、人は何らかの〈組織〉を想起するのではないだろうか。

- (12) 妻はうちで働いています。
 (13) 妻はうちで仕事をしています。

例(12)のような表現に接したとき、たとえば、自営業を営んでいる話者の妻が従業員の職にあることを表し、本来、生活の場である「うち」が、金銭的報酬をもたらす「職場」として感じられる。これを(13)のように「仕事をする」で言い換えると、「うち」はあくまで生活の場としての「うち」で、「職場」のような

営利組織は想起されない。例えば在宅でできる執筆や、受託して行う内職のような生産活動を表すだろう。

もう一つの例を考えてみたい。

- (14) なかなか働かせてくれません。
 (15) なかなか仕事をさせてくれません。

例(14)は話者がある会社に入社したいという希望を表明しているにもかかわらず、会社がそれを認めないことに対する不満を表している。つまり、「会社」という〈場〉が「働く」の前提として存在しており、話者はそこへの所属を切望している。例(15)の場合は、〈場〉は問題とされず、生産活動に従事したいという希望実現を意図的に阻害されていることを表す。同様に考えると、例(16)の「働く」は、「会社」という〈場〉に所属するということを表す。

- (16) 春からこちらの会社で働きます。

それでは、この〈場〉について更に考察してみたい。

- (17) 「市場派は省内ではしよせん少数派だったんです。市場派の言うように規制緩和を進めていけば、経産省で働く大多数の官僚の仕事がなくなる。組織として、それには耐え難かったんじゃないでしょうか」
 (『AERA』、2009年6月1日)
 (18) 今は父の広起さん(45)の下で「漁師見習い」をしている。「漁師になりたい」と思ったのは小学生の頃。父親が海で働く姿が格好良かった。
 (朝日新聞、2007年9月3日)

例(17)の「経産省」、(18)の「海」はそれぞれ動作主体にとって、「給与」あるいは「魚介類」という、〈報酬〉が得られる〈場〉である。しかし、同じ「海上」であっても、動作主体がどこから報酬が得られるかよって、実際に言語化される〈場〉は異なる。⁶例(18)との比較で次の例を見てみたい。

- (19) 今では、タムさんは網あげを、ロンさんはロープ操作を任せられるまでになった。「言葉のハンディがあるのに、こんなはよう仕事を覚えられないなんて思わなかった」(略) 藤川さんが外国人研修生を受け入れようと思ったのは、イカ釣り漁で寄った青森県・八戸港での光景がきっかけだ。八十

人近い外国人が船上で働いていた。ベトナム人、フィリピン人、インドネシア人……。機敏に、まじめに動く姿が印象に残った。

(朝日新聞、2001年1月3日)

例(18)の「父親」にとって、「海」とは魚介類が獲られる場であり、「報酬が得られる場」と言えよう。しかし、同じ漁船の乗組員であっても、例(19)のように、「漁獲」が直接〈報酬〉になるとは考えられず、そこで求められる「船上での作業」によってそれが得られると考えた場合、〈報酬が得られる場〉は「船上」となる。以上から、〈ある場〉というのは、〈動作主体にとって報酬が得られる場〉と限定される。⁷

次に、動作主体の活動について考えてみたい。動作主体は、〈場〉に身を置くだけでは「働く」とは言えず、何かを生み出す活動が求められる。一口に活動といってもいろいろあるが、デスクワークにしろ、肉体労働にしろ、体を動かして利益を生み続けなければならない。それが行われなかった場合の例を見てみよう。

- (20) 判決によると、山下、木口両被告は、元院長の吉田晃(70)、元事務長の水谷信子(74)両被告＝ともに詐欺罪などで公判中＝と共謀。退職看護師を働いているように見せかけた虚偽の勤務表を作るなどして診療報酬を請求し、山下被告は約8700万円(06年4～11月分)、木口被告は4600万円余(同年4～7月分)をだまし取った。(朝日新聞、2009年7月19日)

例(20)は、実際には退職した看護師を「働いているように見せかけた」とある。「見せかける」方法の一つとして、「勤務表を作る」という行為が挙げられている。「勤務表」とは本来、「職場に属し、恒常的に(看護)活動をしている」ということ、すなわち「働く」という行為の实在を裏付ける書類である。

以上から、この別義を立てる上で、〈ある場に身を置く〉、そしてその場で〈身体活動を継続的に行うこと〉という意味特徴が重要である。

3. 3 別義3 〈ある仕組みに〉〈状況を変え得る、あるもの、あることが内在している〉〈認めること〉

- (21) もちろん千五百枚をこえる大作が単なる主題と情感だけで支えられるものではない。そこには作者の並々ならぬ小説技法への配慮が働いている。

(北杜夫『楡家の人びと』、新潮100冊)

- ② 推薦を決定した理由については、「自公連立を重視する党本部の意向が強くはたらいた」と話した。
(朝日新聞、2007年4月4日)
- ③ 書類、日記などを除いてなんでも持って帰れたのだから、せめて医務室の顕微鏡を一台持って帰っていたら！ 島ぼけと栄養失調の**に**ぶく鈍磨した頭脳では、そこまでの**智慧が働**かなかつたのだ。
(北杜夫『楡家の人びと』、新潮100冊)
- ④ 同僚の未婚女性(32)は、いら立ちを隠さない。「妊娠ハイなのか、もしエコー写真を見せた相手が流産経験者や不妊治療をしている人だったら、という**想像が働**かない。エコー写真なんて、家でダンナと2人で盛り上がることなのに」
(『AERA』、2009年6月1日)

例①の「配慮」を〈不都合な事態が起こらないように気をつけること〉とすると、「作者が小説技法に気をつけて書いていることが小説に表れている」ということを示している。例②の「意向」を〈状況が向かってほしい方向〉とすると、「党本部(党幹部)が、推薦を決定する方向にしてほしいという希望を明らかにしたため、推薦を決定した」ということを表している。例③の「智慧」を〈良案を生み出す知的能力〉とすると、「良案を生み出す知的能力が現れなかったため、顕微鏡など役に立つものを持って帰らなかつた」ということを表す。例④の「想像」を〈実際に知覚できないことを頭の中でいろいろ考えること〉とすると、「相手の気持ちについていろいろ考えることがないため、いら立つ」ということになる。

ここまでを見ると、まずガ格に現れるのは〈人間の精神的営み〉の一種と言える。〈人間の精神的営み〉は、複雑なく**仕組み**で成り立っていると考えられる。そして、用例は、〈仕組み〉の中に「配慮」や「意向」などの精神性を認める(あるいは認められない)ことによって、現実の状況が成立したということを表している。ただし、例⑤のような表現も可能であることから、〈人間の精神的営み〉が成立させる状況が望ましいか、望ましくないかは問題にはならない。

- ⑤ 面接の際の某教授の心証が**マイナスに働**いたためだそうだ。
(五木寛之『風に吹かれて』、新潮100冊)

次に〈人間の精神的営み〉以外のガ格について考えてみたい。

- ⑥ ポルフィリン症は、赤血球のヘモグロビンなどを構成するヘムの合成にかかわる**酵素**がうまく**働**かず、ポルフィリンという物質が体内に蓄積して

起こる病気だ。(朝日新聞、2009年6月2日)

- ㉗ 「思った以上に、はじめてくれました。間違いなく雨は有利に働いた」。
馬場状態も味方にし、4馬身差をつけて、歓喜のゴールに飛び込んだ。

(朝日新聞、2009年6月1日)

- ㉘ 主なものを挙げてみると、学歴偏重の考え方、六・三・三の単線型教育体系、教師の労働者宣言、違法スト、授業の過重と画一化、しつけ教育の不足、学区制により教師側に競争原理がはたらかないことによる教師の努力不足、柔軟性を欠いた行政当局の体質等々がある。

(朝日新聞、1984年11月2日)

例㉖は「酵素」という「細胞内の物質」、例㉗は「雨」という「自然現象」を表し、これらは物質的なものである。例㉘は「競争原理」という「勝ち負けを決めようとする法則」で、物質的なものではない。しかし、「酵素」は「ヘモグロビンを組織する一要素」であるし、「雨」は「競馬の勝敗を左右する様々な要因の一つ」であるし、「競争原理」は「教育の質を高める一要素」である。いずれも共通するのは、〈ある仕組みの一要素〉ということである。そして、「酵素」、「雨」、「競争原理」をガ格で言語化するということは、言語主体がそれらを〈その場の状況を変え得る存在〉と認識していると示しているのである。

以上から、「働く」のガ格が、〈ある仕組みに内在する、あるもの、あること〉である場合、その存在によって〈状況が変わり得る〉と認める別義が立てられる。

3. 4 別義4 〈主体が自分自身の都合のために〉〈話者が社会通念的に悪いと考える行為をすること〉

3. 4. 1 「悪事」について

- ㉙ 共産党は3日夜、東京・日比谷公園で「緊急集会」を開き、志位和夫書記局長は「横暴をはたらく者には天罰が下る。国民の厳しい審判を下そう」と、自公3党を激しく批判し、早期の衆院解散を求める考えを改めて強調した。(毎日新聞、2000年2月4日)

- ㉚ 氷見市教委の前辻秋男教育長は26日、「教員自らが詐欺という不正行為を働いたことは、断じて許されるものではない。信頼を著しく損ない、心からおわび申し上げます」と談話を出した。(朝日新聞、2009年6月27日)

- ㉛ 自宅に押しかけてきた作家志望の女性に翻弄されて四苦八苦する高名な作家の話「ドラマ」や、劇場に偶然居合わせた上司に無礼を働いたと思

込んだ下級官吏のあわてぶりを描く「くしゃみ」、結婚申し込みに来たはずが大げんかになってしまう「プロポーズ」など、各作品は上演時間10～20分。
(朝日新聞、2006年1月11日)

- (29) 女性のスカートの中を盗撮しようとひわいな行為をはたらいたとして、松江署は12日、松江市外中原町の食料品配達アルバイト広安慶容疑者(37)を、県迷惑防止条例違反(ひわいな言動)の疑いで逮捕した。

(朝日新聞、2007年1月13日)

- (30) 白昼の都心で発砲し、外国人と組んで盗みをはたらく。「法度」のはずの覚せい剤を売買する。そんな暴力団関係者が全国に約8万5千人いる。

- (31) 埼京線で痴漢を働き逮捕されたのは、著者の学友にして中学の国語教師であった。
(『A E R A』、2007年2月19日)

- (32) 2少年は先月、被害者の友人に暴行を働き、その場にいた被害者に口封じするため呼び出したという。
(朝日新聞、2007年3月17日)

(29)から(35)の例は2節で挙げた辞書の記述「悪事をする、反社会的なことをする」を裏付けている。しかし、この「悪事、反社会的なこと」というのをもう少し掘り下げて考えてみたい。なぜなら、次のような、「悪事」の例は容認度が下がるからである。

- (36) ?みんながいじめを働いたため、彼は学校に来なくなった。
(37) ?殺人を働いて、刑務所に入れられた。

まず注目したいのは、「悪事」と言っても、ヲ格にくるのは動作主体が「自分の都合や欲求を押し通そうとする行為」である。更に、社会的に悪いとされる行為の中で、「横暴」や「不正行為」、「無礼」などは、「いじめ」や「殺人」、あるいは「無視」、「脅迫」などよりも具体性が低い。見方を変えれば、様々な具体的行為は「暴行」や「不正行為」といった抽象度の高い語の範疇にあるものとして考えられる。すなわち、「殺人」を例にすると、誰が見ても「人が人を殺す」という事態は決定的であるのに対し、「無礼」などは、話者がそのように行為を捉えているという表明に過ぎず、人によっては異なる捉え方をする可能性がある。以上から、〈悪事、反社会的〉という意味記述については、あくまで「話者の評価」という見方が必要であろう。

3. 4. 2 「～を働く」の形式について

別義4は、「働く」が自動詞であるにもかかわらず、形式的に他動詞と同型の

「～を働く」となる。この点について、吉村（2004）の指摘を参考にすると、この形式が意味にも影響していることがわかる。

「笑う」「泣く」「飛ぶ」「走る」「泳ぐ」など、非能格動詞の一部が「Yを」という対象を取る構文をよく見かけることがあります。（中略）この種の自動詞が「～を」と共起した際には、事態やようす全体とのかかわりを含意するようです。（中略）他動詞構文のスキーマがもっている受影性の属性を引き継いで、事態の全体性、徹底性、網羅性を前景化した表現に拡張されます。つまり、この種の動詞が表す行為は、本来、対象の欠落した行為者単独で完結するわけですが、わざと対象を描写のスコープに組み込むことによって、対象とのかかわりに注意の焦点が移され、上記のような含意が生まれるものと思われます。（吉村 2004：166 下線は引用者による）

この中の「全体性」という記述から、前項で導いた〈社会通念的〉という意味特徴が関連づけられる。また、「わざと対象を描写のスコープに組み込む」という操作は、「～を働く」の場合、わざと〈悪い行為〉の成立をスコープに組み込もうとしているといえよう。⁸

このように、自動詞（非能格動詞）であっても、他動詞構文のスキーマに関連づけることで、新しい意味を生み出すことが可能である。⁹

4 プロトタイプの意味の認定¹⁰

3節では、1節で挙げた例に即して別義を4つ設定し、それぞれについて詳細に見てきた。それらの別義うち、まず別義3は受身形での使用が難しい（「*雨に働かれる」）。また、別義4はヲ格とともに用いられ、それが〈悪事〉を意味する語に限定されるという、他の別義にはない制約がある。以上、この2義は用法上に制約があり、周辺的な別義であると考えられる。

次に別義1、別義2について考察してみる。この二つの意味の違いの最もはっきりしている要素は、〈職場〉が意味の記述の参与者として際立っているかどうかということである。両義とも用例が多く存在し、どちらがよりプロトタイプ的であるかはなかなか判定が難しいが、次のように形を変えたり、複合語の一部にしたりして認定を試みる。

(38) 遊んでばかりいないで、ちゃんと働いてよ！

- (39) そんなに働かせたらかわいそうだよ。
 (40) そろそろ働こうか。
 (41) あんまり働きすぎると、体をこわすよ。

例(38)は別義1の〈集団への貢献(勤勉な就労態度)〉を要求しているだろうか、それとも別義2の〈場に所属すること(就職)〉を求めているのだろうか。同僚の発話であれば前者として考えられ、配偶者の発話であれば別義2と考えられる。(39)は使役の形であるが、〈集団への貢献〉を強制している。したがって、別義1と考えられる。(40)の意志の形の場合は、「就職しようと思う」ことを表しているため、別義2になる。(41)は複合動詞の前項として使われている例であるが、この場合は〈継続的な知的、肉体活動〉を表していて、別義1と考えられる。

以上、いくつか考察してみたが、用法上の制約の差を明確に示すことはできなかった。これは両義を支えるフレームの同一性に起因するものと思われる。¹¹この点については、5.2で更に検討するが、本稿はプロトタイプの意味を別義1および別義2であると判断する。

5 多義ネットワーク

5.1 二次的活性化について¹²

別義3、別義4は別義1と別義2に比べると「働く」のカテゴリーの中では周辺の意味であることがわかった。しかし、「作用する」「(悪事を)する」という語ではなく、別義3、別義4としての「働く」という語が用いられたとき、「作用する」「(悪事を)する」にはない感覚が呼び起こされる。この点に関して、まず別義3から考察してみよう。

- (42) 人間の体の中では毎日がん細胞が発生していると言われているのです。
 では多くの人はなぜ、発病しないのでしょうか？それはさまざまな免疫細胞が運動し、がんを死滅させるために働いているからです。

(<http://agribio.takara-bio.co.jp/meneki/immunity01.html>)

- (43) ?それはさまざまな免疫細胞が運動し、がんを死滅させるために作用しているからです。

(42)の例は、実際には「作用する」と同じ事態を指していると考えられるが、「働く」の場合は細胞同士が運動したり、潜在的に「がんを死滅させる」という目

的に認めることができ、あたかも免疫細胞自体に自律的能力があるように感じられる。この例を「作用する」に言い換えると不自然に感じるのは、「作用する」にはこのような意味特徴がないからである。そして、「働く」のこのような特徴は別義1の〈知的、肉体的能力を駆使する〉という意味特徴の二次的活性化によるものであると考えられる。

別義4についても同様の二次的活性化がうかがえる。

- (44) 彼は上司に言われるがまま業務を行っていたが、気づかないうちに不正をしていた。
- (45) *彼は上司に言われるがまま業務を行っていたが、気づかないうちに不正を働いていた。

例(44)は、動作主体「彼」は業務を行っていたが、結果として、その行為は社会的に不正なことであったということを示す。この場合、「彼」は一つ一つの業務を通常の業務として捉えており、「気づかないうちに」とあるように、不正を行おうという「彼」の意志は認められない。この例を(45)のように「働く」で言い換えることはできない。なぜならば、「働く」を用いると、別義1の〈知的、肉体的能力を駆使する〉という、主体の積極的な意志性が二次的に活性化してしまい、「気づかないうちに」という、無自覚を表す表現と合わないからである。

以上から、別義3、別義4を用いるとき、別義1の〈知的、肉体的能力を駆使する〉が二次的に活性化していると言うことができる。

5.2 多義ネットワーク

ここでは、今まで検討してきた別義間の相互関係について考えてみる。

- 別義1** 〈動作主体を含んだ集団に貢献するために〉〈しなければならないことや期待されることを〉〈知的、肉体的能力を駆使して継続的に行うこと〉
- 別義2** 〈動作主体が報酬を得るために〉〈ある場に身を置き〉〈そこで求められることを〉〈身体活動によって継続的に行うこと〉
- 別義3** 〈ある仕組みに〉〈状況を変え得る、あるもの、あることが内在していると〉〈認めること〉
- 別義4** 〈主体が自分自身の都合のために〉〈話者が社会通念的に悪いと考える行為をすること〉

4節で指摘したが、別義1と別義2からは、以下のように共通のフレームを見

出すことができる（以後、便宜的に「労働のフレーム」と呼ぶことにする）。

- ① （主に）人間が知的、肉体的能力を駆使して行う身体活動である。
- ② 動作主体は〈場〉（あるいは集団）に属する。
- ③ 動作主体の身体活動は集団に貢献する。
- ④ 動作主体は集団、あるいは〈場〉から報酬を得る。
- ⑤ 動作主体は継続的に身体活動を行う。

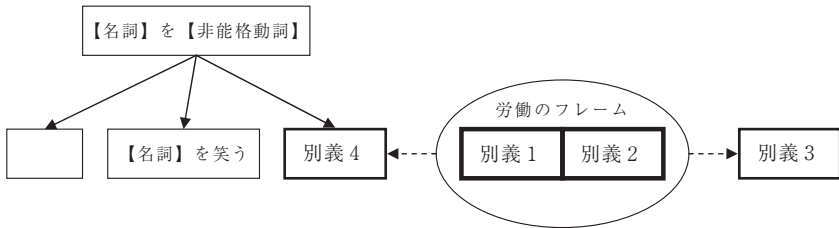
このうち、別義1で焦点が当たっているのは①、③、⑤であり、別義2で焦点が当たっているのは②、④、⑤であると言えよう。すなわち、別義1と別義2は、労働のフレーム内での焦点の移動によって確立した意味ということになる。¹³

次に、別義3について考えてみると、〈ある仕組み〉というのは、労働フレーム内の〈場〉から写像されていると考えられる。そうすると、そこに内在し、何らかの状況変化を生み出す〈もの、あること〉もまた、〈場〉（組織）に属する動作主体からの写像と考えられる。また、4.1で触れた擬人化についての考えをここで再び援用すると、〈状況が変わること〉（すなわち「出来事」）は〈（貢献的）身体活動を行うこと〉（すなわち「行為」）である。以上から、別義3は労働のフレームからメタファーによる拡張が行われていると言える。¹⁴

最後に別義4についてであるが、これも労働のフレームの〈人間が知的、肉体的能力を駆使して行う身体活動である〉という部分で共通している。また身体活動によって、何らかの〈成果〉を生み出すという点も共通している。しかし、生み出す〈成果〉の内容が特殊で、話者によって「悪事」と断ぜられるものである。いずれにしても、別義4も労働のフレームと共通する部分を持つため、メタファーによって拡張された別義と考えられる。また既に見たように、この別義の〈社会通念〉としての「悪事」は、「～を【非能格動詞】」という形式とも意味的に関連づけられている。

以上をまとめると「働く」の別義の相互関係は図1のようになる。

図1 「働く」の多義構造



6 まとめ

(46) はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり

ちつと手を見る

(石川啄木『一握の砂』、新潮100冊)

言葉の意味は流動的であり、石川啄木が生きた明治時代と現代の日本人の「働く」の意味のカテゴリーが異なるというはあり得る話である。第一次産業に従事する人口が多かった時代、生活の糧を得る手段は肉体労働が主で、それが「働く」のプロトタイプの意味であったと考えられる。やがて社会、産業形態の変遷により、契約に基づく、労使の雇用関係の中に身を置くことによって生活の糧を得ようとする人口が増えてきた。そういった時代の流れとともに、「会社、組織内に身を置く」ことを前提とした「働く」の意味、つまり本稿で別義2とした意味も多く使われるようになってくることは自然の流れであろう。かつて安定した生活を約束した終身雇用もはや過去の雇用システムとなり、いまや転職、派遣労働によって生活の糧を得ようとする人口が増えた現代においては、(46)の「はたらけど、はたらけど」は別義1としての肉体労働の量や貢献度よりもむしろ、別義2によって「職場を転々と変わる」という解釈がなされるようになってもお不思議ではない。

言葉の意味を考えると、人が生きる外界と相互作用することによって常に更新されるという前提に立てば、こういったプロトタイプの意味の移り変わりは至極自然なことであると考えられる。

注

- 1 引用例文中における下線は全て引用者によるもので、実線は分析対象語、破線は分析対象語以外の注目すべき箇所を指す。なお、実例の出典は例文の後ろの()で示すが、出典が記されていないものはすべて作例である。
- 2 初山(2002:97)は、多義語を「一つの音形に、関連のある複数の意味が対応している語」と定義している。また、多義語であると認定する、複数の意味に対応する関連語としては、反義語、類義語、上位語が挙げられている(102)。本稿はこれらの関連語のうち、「働く」の各別義に対応する類義語を想定することによって、「働く」が多義語であると示す。
- 3 例文の出典がすべて古典だったため、本稿では取り上げない。
- 4 日本語の動詞語形変化を表すが、かなり限定的な使われ方であるため、本稿では取り上げない。
- 5 高尾(2003:210)は包括的レベルのメタファーの代表として擬人化を挙げている。包括的なレベルのメタファーとは、「行為」と「出来事」のように、より一般的なレベルの概念の対応であるとされる。すなわち、非意図的な「出来事」を、意図的な「行為」で表すことである。そう考えると、「盲導犬の活動」がたとえ人間に訓練を受けた活動であっても、実際には盲導犬次第の非意図的な「出来事」となる。それをこの例は意図的な「行為」として捉えているのである。
- 6 ここでいう〈報酬〉とは、物理的なものだけでなく、「満たされた気持ち」、「やりがい」といった心理的なものも含めて考えている。
- 7 他にも、いわゆる会社の営業マンやタクシーの運転手なども、就業時間の大部分を社屋外で過ごす。にもかかわらず、「車内／道路上／〇〇地区で働いています」と言わず「A社で働いています」と表現するのは、会社外の場所(「車内」「道路上」「〇〇地区」)から報酬を得ているのではなく、所属会社から報酬を得ると考えるためである。
- 8 吉村(2004:71)は、「死ぬ」という非対格動詞について、状態変化を起こすエネルギーをどこから得たかを概念化せずに、結果(「対象—状態変化」)の部分だけを強調する語彙の一つであるとしている。そして、その区切られた一定の区画部分のことをスコープ(scope)と呼んでいる。
- 9 スキーマとは、カテゴリーの全成員に共通して想定される抽象的な理想像のこと(吉村 2004:47)。
- 10 初山(2002:107)は、プロトタイプの意味を、「複数の意味の中で最も基

本的なもの」としている。基本的であるということは、最も確立されていて、中立的なコンテキストで最も活性化されやすい（想起されやすい）といった特徴を有するとされる。例えば、用法上の制約がない（修飾語句を必要としない等）意味が、よりプロトタイプの意味と認定される。一例として、次の比較によって、「もの」のプロトタイプの意味が〈人間〉ではなく、〈物体〉であることが示されている。なお、本稿でも用法上の制約の程度差をプロトタイプの意味の認定基準として考えることとする。

- a. ここにものを置かないください。
 - b. 私のようなものが出席してよろしいでしょうか。
 - c. *ものが出席してよろしいでしょうか。 （昀山 2002：107の例）
- 11 フレームとは、日常の経験を一般化することによって身につけた、複数の要素が統合された知識の型を指す（昀山 2002：29）。
 - 12 Langacker (1988：69) は、ボクシングなどの試合場について、[ARENA（闘技場）／arena]（大文字は指し示す概念を表し、小文字はその音韻を表す）と言うより、[ARENA（闘技場）／ring]と言ったほうがくある活動の場所に完全に囲いをめぐらす」という観念が強化されると主張する。その理由として、基本義[CIRCULAR OBJECT（円形の物体）／ring]のもつ要素〈完全に周りを囲む〉が二次的に活性化されるためであるとしている。
 - 13 山梨（2000：72-74）や国広（2006：244-249）では、動詞「掘る」を例に、その多義性（「庭を掘る」「穴を掘る」「土を掘る」）は同一フレームの異なる要素に焦点が当てられることによって生じると論じている。本稿も同様の主旨で別義1と別義2を関連づける。
 - 14 メタファーとは、二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩のこと（昀山 2002：65）。

参考文献

- 国広哲弥（2006）『日本語の多義動詞』，大修館書店
 高尾享幸（2003）「メタファー表現の意味と概念化」，松本曜（[編]）『認知意味論』，大修館書店，pp. 187-249

- 舩山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』, 研究社
 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』, くろしお出版
 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』, 研究社
 Langacker, Ronald W. (1988) “A View of Linguistic Semantics.”, *Topics In Cognitive Linguistics*, ed. Brygida Rudzka-Ostyn., pp. 49–90.
 『新明解国語辞典』第六版 (2005) 山田忠雄, 柴田武, 倉持保男, 坂井憲二, 山田明雄, 三省堂
 『広辞苑』第六版 (2008) 新村出 [編], 岩波書店
 『講談社 類語辞典』(2008) 柴田武, 山田進, 加藤安彦, 舩山洋介 [編], 講談社

例文の出典

- ◆ 新聞、雑誌からの出典は以下のデータベースを使用し、引用箇所は例文の後の () 内に新聞名、日付を示した。
 - 聞蔵『朝日新聞』、『AERA』
 - 『毎日新聞2000』CD-ROM版
- ◆ 小説からの出典は以下のデータベースを使用し、引用箇所は例文の後の () 内に著者名、著書名を示した。
 - 『新潮文庫の100冊』CD-ROM版 (「新潮100冊」と略記)
- ◆ インターネットからの出典は引用箇所の後の () 内にURLを示した。